

乱紋

〈上〉

永井路子

文春文庫



文春文庫

乱 紋 (上)

定価はカバーに
表示してあります

1979年8月25日 第1刷

1992年9月10日 第20刷

著 者 永井路子

発行者 新井 信

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-720007-4

文庫

乱 紋

(上)

永井路子



新潮社

乱
紋
上

初出掲載紙

「東京新聞」(ほか二社)

一九七二年六月二十七日～七三年八月二十五日

襦^{うち}褌^{かけ}

そのひとは、いつも前ぶれなしに疾風のようにやって来た。やって来るなり、皆、変わりはないな」

せかせかと姉妹を眺めまわして、また疾風のように去ってゆく。ところが、今度は、

「明後日ゆく」

前もって意味ありげな予告があった。

「折り入って姉妹たちに話がある」

と言う。その上、知らせをもって来た使いまでが、

「姫さまがたのお身の上についてのお話であられますそうな」

気になる一言をつけ加えた。

そのひと——とは羽柴秀吉。織田信長を弑した明智光秀を倒し、同僚柴田勝家を倒し、いま一

歩で天下人になろうとしている男である。

天正十三年の新春――。

ここ安土の城から見える紺碧の琵琶湖に、風が渡るたび銀の針のように小波さざなみがきらめく。そしてその銀の針は、たちまち城に住む人の肌に容赦なく突き刺さって来る。

本能寺の変の折りに焼かれて以来、安土の城は見る影もない。応急のつくろいはしたものの、白亜の壁に黄金の瓦を輝かせて外人宣教師をも驚かした昔日の姿からは程遠く、何やら場ちがいに生きのびている感じがなくてもない。

そういえば、ここに住む人々も、どうやら場ちがいに生きのびたような人間ばかりだ。

その一人は信長の孫、三法師。表向きは六歳のこの幼児が城のあるじだが、父信忠が信長と共に死んでしまった以上、この苛酷な戦国の世を、どうやって生きてゆくことか。

同じことは、ここにいる三人姉妹にもいえることだ。

お茶々十八歳、お初十六歳、おごう十四歳。

彼女たちの不幸は、十数年前、小谷城の城主であった父浅井長政を失ったことからじまる。

このときの攻め手は、皮肉にも、母のお市の兄にあたる織田信長であった。

落城のとき、三姉妹は母とともに、攻め手の伯父、織田信長にひきとられた。彼女たちが城を出て間もなく、父は城と運命をともにした。

それから約十年間、彼女たちは、伯父の清洲の城で無為の歳月をすごした。母も娘たちも、それは全く、誰のために生きているというのでもない日々であった。

天正十年、伯父が本能寺で明智光秀に殺されたあと、保護者を失った母は、柴田勝家と再婚し、これに従って越前北庄きたのしょうに行ったが、半年程のうちに羽柴秀吉に攻められて、これも落城した。

このとき、母は新しい夫の勝家とともに死に、姉妹だけが攻め手の秀吉にひきとられて、安土城に住むようになったのである。

それだけに、上の二人は、自分たちの運命については、かなり敏感になっている。秀吉からの伝言を聞くなり、

「姉さま、私たちにお城から出てゆけつて言うのでしょうか」

そう言ったのは次女のお初である。

「そうかもしれないわ」

お茶々は美しい眉をひそめてうなずいた。

「もしそうだとしたら？ 私たち、どこへゆけばよろしいのでしょうか」

ああか、こうか——語りあっていた姉妹の口がそのうち、突然、ぴたりととまった。

一座に坐りながら、全く話に加わって来ないおごうの表情に気づいたからである。

「おごう。聞いているの？」

たしかに——。

おごうのそのときの表情は、二人の姉のお気に召すようなものではなかった。

美しい姉たちが、肩をよせあって、行く先を案じているというのに、おごうはひとり、ぼんやりと碧い湖面を眺めていたのだから。

「おごう」

もう一度、お茶々のきびしい声が飛んだ。

「どこを向いています」

「……」

お初も姉にならって、眉をしかめた。

「ほんとうに、大事なお話だっていうのに……。いったい、何を見ているの、おごうは」

その間に、おごうは、ゆっくり坐り直していた。それから、黙って二人の姉の顔を見あげた。が、美貌の姉たちにくらべて、何と見劣りする眼鼻立ちであることか。上二人のぬけるような色の白さとはまるきりちがった浅黒い肌、ちんまりした鼻、部厚い唇、決して小さくはないのだけれど、眠たげな瞼に蔽われて印象のはっきりしない瞳——。何よりもどかしいのは、その動作の遅さであろう。

今もゆっくり時をかけて目ばたきをし、ごくりと唾をのみこんでから、おごうは口許にかすかなほほえみをうかべた。

いや、ほほえみではない。何か言おうとして口許をほころばせたのだが、それが、またもや、お茶々を興奮させるたねとなった。

「笑っているときではありませんよ、おごう」
すかさず、お初も叫ぶ。

「ほんとに、この子ったら……」

でも、おごうは黙っている。姉たちのように、すぐには言葉が出て来ないのだ。ほほえみに似たものは、頬の上に、にやにやしているような、それでいてべそをかいているような、歯ぎれの悪い表情を作ってからゆっくり消えた。

「笑いごとじゃないのよ、おごう」

お茶々はもう一度言った。

「あの秀吉が、あさってここへ来るといふのよ。それも、わざわざ前ぶれをして……」

「……」

「そんなことは、今までになかったことよ」

「そうだわ、お姉さまのおっしゃるとおりよ」

お初もそばから口を出した。

「もう、私たちは頼る人なんかいないんですからね」

お茶々の美しい切れ長な瞳が吊りあがった。小さく整った鼻すじ、ひきしまった口許。絶世の美人と言われた母親、お市の方によく似た顔たちである。

が、お市が、きびしさを裡に秘めながらも、むしろ物静かな美女だったのにくらべて、少女のころから苦勞したせいとか、お茶々は鋭さが先に立つ。しかも、おもしろいことに、こんなふうにずけずけ物を言うときに、その美しさは、かえってきわだつのだ。

それでもおごうは黙っている。お初は、ほとほとあきれた、というふうに叫んだ。

「ほんとうに、この子ったら、いつもこうなんですものね」

お初には、お茶々のような凄みはない。ひとつひとつの造作がたっぷりしていて、見ばえのする顔たちである。大ぶりのぼたんの花のような華やかさは、お姫様として上段の間にすえられたら見ばえがするであろう。表情のめりはりのあざやかなお初は、大げさに顔をふって、ためいきをついた。

お茶々は蔭では秀吉のことを呼びすてにしている。

従三位、権大納言——。

明智光秀を倒して以来とんとん拍子に出世している彼ではあるが、できることなら伯父同様に、「猿」

とても呼んでやりたいくらいなのだ。

なぜなら、この十数年来、彼女たちが不幸に直面するとき、必ずこの男がかかわりを持って来ているからだ。

「あなたは、まだ小さかったから、覚えていないだろうけれど」

お茶々は、おごうに、彼女たちの父、浅井長政が、伯父の信長に攻められたときのことを話して飽きることがない。

あのときの攻め手の先鋒には、まだ木下藤吉郎と呼ばれていた「猿」がいた。

「御落城ときまると、お父さまは、お母さまにおっしゃったのよ。信長はそなたの兄だ、よもや粗略には扱うまい。姫たちを連れて、いますぐ城を出るように、って」

お初が、しゃくりあげたのは、その瞬間だった。お茶々が話しはじめたとたんに、じつに要領よく、大きな眼いっぱい、涙をあふれさせてしまっていたのである。

「覚えてますわ、そのときのこと。ああ、お姉さまはお六つ。私は四つでした」

が残念ながら、たった二歳の幼女のおごうは、逆さに振っても、そのときの記憶は、ひとかけらもない。そしてこのときのお初の、これみよがしのしゃくりあげ方には、

——ほうれごらん。

とてもいうような、女の子特有の意地悪が含まれていなかったとはいえない。浅井滅亡の記憶に関する限り、お茶々とお初は、おごうに対して絶対優位を誇る立場にあった。

特別な宝物を持っている子供たちが組になって、それを持たない連中に見せびらかすことはよくあるが、共通した不幸の体験も時として、女の子にとっては、「宝物」になり得るものだ。

それかあらぬか、

「あなたは覚えてないだろうけれど」

お茶々はもう一度繰り返した。

彼女たち姉妹の間には、二人の兄弟があった。兄を万福丸、弟は異腹の万菊丸。万菊丸は長政の側室の所生で、つい三カ月前に生まれたばかりの嬰兒だった。

そのころ——すなわち戦国時代は、女子は非戦闘員とみなされていたから、落城のときも命は助けられるのがふつうだったが、男の子は、いくら幼くとも殺されることになっていた。

そこで、二人の男の子には、それぞれ供をつけてひそかに逃がしたのだが、万菊丸の方はすぐ消息不明になった。生後三カ月の嬰兒では育つ力もなかったのだろうか。兄の万福丸も、その後まもなく捕えられて殺された。そしてこのとき、彼をさがし出して殺したのが、藤吉郎秀吉なのである。

「だから、お母さまは、あのひとのこと、とてもおきらいだったのよ。それに」

天正十年信長の死後、お市が柴田勝家に嫁ぐと、またもや秀吉が攻めて来た。そして母は死に、彼女たちは孤児になった。秀吉はだから、姉妹にとっては疫病神やぐひようがみのような存在である。その彼が来るといふのは、ろくなことではあるまい。

こう言いかけて、またもやお茶々はきびしい顔つきになった。

「聞いているの？ おごう」

おごうは、またもや失敗をやらかしたのだ。お茶々の話を聞いているのかと思ったら、いつのまにか、庭の方へ視線を遊ばせていた。

「あなたは、まあ、なんて子なの」

「この大事なお話の最中に……」

ゆっくり唾をのみこんでから、返事をしようとしたおごうを姉たちはもう待っていないかった。

「もう、いいわ、おさがり」

「ここにいたって何の役にも立ちやしない」

が、追いたてられて幸いだったかもしれない。もしも姉たちがその返事を聞いたとしたら、二人はさらに躍りあがって妹を叱りとばさなければならなかったろうから。

「犬かしら、それとも……」

おごうは、そう言うところだったのだ。

庭の隅の枯れた草むらの中で、ゆらりと黄色い尾のようなものが揺らいだのだ。

——狐だったら、もっとすてき！

あるいはそう思っていたのかもしれない。が、少なくとも、今のおごうには、そのほうが興味がある。いくら二つで記憶がないといったって、これまで三日にいったんぐらいの割り合いで、小谷落城の話は聞かされている。何も今度がはじめてではないのである。

「おさがり」

姉たちにそう言われたおごうは、一礼すると部屋を出た。それを待ちうけたように、すり寄って来た人影があった。

侍女のおちかである。

「姫さま……」

おごうは立ちどまった。ゆっくり唾をのみこみ、おもむろに口許をほころばせた。こんどはそのまま、無邪気な笑顔になった。決して美人ではないが、その口許にあいきようがある。

——お姉さまがたは、姫さまがこんなお顔をなさるところまで待つてはくださらない。

それがおちかには残念でたまらない。

——どうして姉君さまがたは、おごうさまをいたわってくださらないのか……。

これは、ひとつには、おごうの不器量さによるものらしい。口にこそ出さないが、二人の姉は自分たちの美貌に自信がある。そして時折り、彼女たちが極端に見劣りするおごうを、まるで階級のちがう人間のようにみつめることを、おちかは知っている。今日もその身を案じて、ひそかに縁外にしのんでいたのだが、おごうは果たせるかな、のけものにされてしまった。

おちかには、誕生以来ずっとつき添って来たこのおごうを、姉たちが思うほど、まぬけではないと思っている。ただ困るのは動作がおそく、口が重いことだ。

「姫さま……」

自分の部屋に戻りながら、おちかは後から、そっと小声で言った。

「ああいうときは、何でもようございますから、お早くお返事をなさいますせ」
おごうは立ちどまった。

「だって……」

はじめて、ゆっくり口を開いた。

「あさって、お話を聞いてみなければ、お返事なんかできないわ」

正直すぎて、馬鹿々々しいような答えである。

が、気のまわりすぎる美貌の姉たちと、ちょっと抜けたような、このおごうの言い分と、どちらが当を得ていたか、それは神のみの知ることであった。

いよいよ秀吉が来るというその日は、寒さのせい、城から見える湖は、さらに蒼さを増した。

風も一段と激しさを加え、湖面いっぱい白波を蹴立てながら、城に向かって吹きつけて来た。

湖をみつめるお茶々の瞳も、朝から何となく落着きがない。何度か部屋を出たり入ったりしているのは、秀吉のもたらす話が気がかりなのであろう。

もっとも、お初のほうは、一昨日のことはけろりと忘れてお化粧に余念がない。姉妹の中で、いちばんおしゃれな彼女は、何はともあれ、美しく装うことがうれしいのだ。

この正月には、とりたてて城を訪れて来る客もなく、とき色地に白梅を散らせた自慢の小袖を着る折りがなかった。秀吉がいかに招かれざる客であろうとも、ともかく晴れてお化粧をし、あの小袖を着られるというだけで、お初はいそいそとしてしまうのである。

では、おごうは？

彼女の姿は見えない。朝から湖に面した障子は閉じられたまま、おおかた部屋の中のおごうは、何もせずに、ぼんやりと部屋の隅を眺めているのだろう。

秀吉がやって来たのは昼すぎだった。どたどたと廊下を踏みならして来るなり、
「おお、安土のお城は、やはり、いちばんみごとじゃな」

波騒ぐ湖面をちらと見たあと、

「三法師さまに御挨拶せねばならぬ」

出迎えたお茶々たちに、ろくに会釈もせず、本丸に姿を消した。

後に残ったお茶々は軽く唇を噛んだ。

——うそつき。このお城がいちばんみごとだなんて……。

たしかに信長のいたところは天下一のお城だったかもしれないが、焼かれたあと、秀吉は修理費をけちって、ろくな手入れもしてくれない。表面は、おあとつぎの三法師さまのお城、などとい

つてはいるが、大坂に、これより数倍豪華な自分の城を作っていることは、すでにお茶々の耳にも入って来ている。

——臣下の分際で、ここよりりっぱなお城を作るなんて……。

三法師さまを立てているけれども、その実は、自分が天下をもにしたいのではないだろうか。お茶々の推測はどうやら当たっていたらしい。今本丸へいったばかりの秀吉は、もうお茶々たちの曲輪くわのほうへ戻ろうとしていた。おそらく、三法師君への拝謁は、形ばかり、ごくお手軽にすませたものと思われた。

「おう、待たせたな」

近づくなり、秀吉はそう言った。まるで自分の居間にも入るように、さっさとお茶々の部屋に入ると、どっかとあぐらをかき、次々として来る三人姉妹を見あげて頭を振った。

「ふむ、ふむ、よい娘になられた」

お茶々が新年の挨拶をするのを聞こうともせず、その顔をまじまじと見た。

「姉君はいくつか」

「十八になりました」

「次は」

「十六でございます」

お初は氣どってしなを作った。

「次は」

ああ、またしても、このとき、おごうは、おくれをとった。やっと唾をのみこみ、ぼそぼそと、十四と言ったそのとき、秀吉はなぜかにやりとしたようである。